ソ連技術者
地質調査所を見学

先日（36. 8. 15〜9. 4）東京晴海埠頭で開かれた　ソビエト商工業見本市に　専門部門の説明係として来日していた2人のソ連邦技術者が　8月31日地質調査所を訪れた．　その1人ガゲリガンツ氏は　バクー市地球物理学研究所技師で　昨年来日したフェデンスキー教授の門下で海洋地震探査を担当している．　またプロシャイ氏は　ソ連地質資源保安省技師で　金属鉱床調査の専門家でレーニン賞の受賞者である．　なお　モスクワ大学日本語科教授のザシパイロフ氏が　外人ばなれのした実に流ちょうな日本語で通訳にあたった．

一行は当所物理探査部の地震探査関係の研究室を中心に約2時間にわたり見学し　探査機器を前にしての質疑意見交換は微にいり　細にわたって行なわれ　予定時間をはるかにオーバーする熱心さであった．

続いて会議室で地質・物探関係の所員約40名と席を並べて懇談し　中途から2つのグループにわかれG氏　P氏をそれぞれ囲んでこまかい討論を行なった．　ソ連の地質調査　探査技術の現状は耳に新しいものが多いだけに双方ともきわめて熱心であった．　物探関係では　オホーツク海　黒海などで行なわれた　大規模な地震探査（モホの深さを求めるもの）に話がおよんで　爆薬量　測量方法等技術的につっこんだ説明が　ガゲリガンツ氏によりなされた．　これに関連して　最近日本でも脚光を浴びつつあるスパーカー調査が　ソ連でもすでに大規模に実施され Gas explosion によるものも実験されているとの話を聞き　さすがはソビエトと思わせるものがあった．　話はさらに反射法地震探鉱の解析から　電気探査にまで及んだが　海上地震探鉱につきものの漁業補償問題にふれた際　ソ連では補償の必要性からさらに進んで被害をより少なくする爆発方法につき研究されているとの話は印象的であった．　なお　ソ連の物理探査の中央機関であるVNIIには　11の支所を含み　約6,000名の技術者がいるとのことである．

プロシャイ氏を囲んでの地質関係の話し合いは　広い話題に花が咲いた．　ソ連の図幅調査は　現在全土の1/20万図幅作成を目的として各地で進行中である．

レニングラードの地質作図研究所は約1,600名の Dr. Engineer をもち　400カ所の field に活躍させている．通常10名位の作図隊が　夏季約4カ月（6—9月）に20〜30 km² 位の面積を調査しているが　場所によりボーリングを活用しているとのことである．　カザック共和国の平原では　ボーリングによって厚い新期堆積物の基盤岩から鉱床を発見し　開発の計画が進められているという話であった．　鉱床研究所　石油・ガス研究所は　別に独立した組織で　やはり多数の技術者が　それぞれの専門に従事している．

また地質技術者の給与は　専門学校（日本では大学）卒の初任給で1,000ルーブル（旧ルーブルで　1ルーブルは90円）位　物価　生活様式の違いはあろうが　この点でもわが国が肩を並べられるのは大分遠い先らしい．　出張期間には40〜80%の野外手当が支給されるそうである．なお　鉱床を発見すると賞金（20万ルーブル位が普通）がもらえる話もおもしろい．　プロシャイ氏はすでに5回賞金をもらったそうである．

時のたつのも忘れて話し合った末　再会を約してささやかな杯をあげた．　種々の点でソ連の研究の組織とスケールの大きさを改めて認識させられたが　いずれにせよ外国の技術者を囲んでかくも詳細に熱の入った話し合いを行なったことは　これまでにも例がなかった様に思われ感銘深い半日であった．　（地質部　物理探査部）

小林技術部長の挨拶（正面向かって右ガゲリガンツ氏　左プロシャイ氏　1人おいて通訳　ザシパイロフ氏）

地震研究室を見学するソ連技術者